仮面ライダーディケイド×ＩＳ（インフィニット・ストラトス）×とある科学

投光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーディケイド×ＩＳ（インフィニット・ストラトス）×とある科学

【Ｎコード】
Ｎ５４７９Ｚ

【作者名】
投光

【あらすじ】
仮面ライダーと二つの科学が交差する
注）学園都市はあまり関係がなくなります

エピローグ

「会場は、ここだな」

一人の１６歳ぐらいの青年が広いホールみたいな会場を見てそうつぶやいた

「任務、開始（スタート）」

彼の言う任務は、試験会場の護衛であり、試験官みたいな役割である

そのため決死って迷子になってはならない

「・・・・・やば、迷子だ」

前言撤回だ、こいつは迷子（ばか）だ

「あり～おかしいな～後輩を連れてきたのにな～」

もはや、哀れとかしかいえない状況、しかもどんどん奥にはいっていく

「やはり戻ろうか？こうならこの会場ごとば――――――ん？」

見ると、同じ状況なのか一人の制服を着た生徒が迷っていた

「あの～、試験会場はこっちですかね～」

等々にそんなことを聞かれた

「・・・い、一応いっておこう、俺は風紀委員（ジャッジメント）だ」

しかし、彼は風紀委員ではない、その説明はまた次回だ

「あ～あの学園都市の」

「でも、何でですか？ここ、学園の『外』ですよね？」

「なんか？とびきり大事なことがあるとかないとかで、呼ばれたんだ」

「ふ～ん」

「あ、そうだここにいきたいんですけど？」

「あ～～っう・・・・・俺も、迷子なんだわ」

「え～～～！！」

とりあえず、二人で試験会場もとい出口を探している

「あり？そういやぁ～まだ名前聞いてなかったな」

「はい、俺、織斑一夏（おりむら いちか）です」

「おう、俺は、十年士（とおねつかさ）だ」

「さ～て～、とりあえず部屋をあたるだけあたろう」

「はい！」

で、いろいろ迷った結果ある部屋についた

あったのは、

「・・・ＩＳだよなぁ～あれ」

「たしかに」

ＩＳ，この世界では、学園都市の『外』の兵器としては最強を誇る兵器である。はっきいって学園都市とＩＳが戦えば世界がふつ～に壊れるといわれている。なので、学園都市とＩＳ委員会は戦争をしないという名目でこれまでの平和に保たれていた

「・・・・・面白そうだ、触ってみるかぁ、織斑」

「え～！・・・でも、面白そうですね」

その部屋に一つだけ置いていたＩＳに一夏が触った

ピカーーン！ＩＳの起動音が聞こえた

「うわっ！え～～起動したぜぇ～い、織斑くんよ～」

「いやいや、おかしいですって、ほら、ＩＳから離すと移動音がなくなりましたよ」

織斑はＩＳから手を離した

「・・・・・じゃあ、見間違いじゃないか俺が試す」

士も触ってみた、すると

ピカーーーーン！と起動音が聞こえた

その時、バタン！と閉めたはずのドアが開いた、中に複数の女性がやってきた

「あなたち何やっているの！」

「防犯カメラで見たけどもう一人いたなんて、おどろきよ！」

女の人全員が携帯をかけている

「やばいことになったね～織斑くん」

「そうですね」

二人はたちすくしかできなかった

ＥＰ２，入学（前書き）

オリキャラ紹介
十年士（とおねつかさ）
性格：あまり女には興味がなく、基本的にだれでも優しく接するのでよく誤解される、だが特定の人間にしか本当のことを話さない
特徴：どこかで人間を差別しているのか、差別している人間にはフルネーム、認めた人間は上の名前で呼ぶ、下の名前で呼ばれる人間はあまりいない

EP2，入学

「ああ、学園都市はお前にまかせるよ、――――あ？・・うん、荷物は『外』のホテルに送ってもらった。おう、・・・まぁ、こっちのことは心配ないから安心しろ――――――じゃあな」

士は携帯を切った、それと同時に黒いスーツを着た女性が入ったきた

「おい、士、お前誰に電話していた？」

女性は知り合いに話す口調で聞いていた

「いやいや、・・・・ただ、しいていうなら不格好な携帯を持ったダチかな・・」

「そうか」

女性は少し黙った

「そういやぁ～あ、学園都市と戦争にならなかったのか？・・・・織斑さん？」

「ここでは、織斑先生だ、ばかもの」

「へいへいよ～」

ただ、学園都市とここでは『上』と呼ばれるＩＳの組織の上司が一時的な口論となり、戦争の引き金にもなると予想はさ

れた、だがどちらも望むことのない結果だったのでどこの組織の勧奨を許さないＩＳ学園に入れることでこの問題は解決した、その問題があって彼は、入学式にでれなく、１日遅れで入学するかたちになった

「・・・・・・あいかわらず、私は認められてないか？」

「いんや、織斑さんを認めたら俺が認めた人間が可哀そうになるからさ」

士は、それだけ言うと織斑先生と教室に行った

「お前たち、席に着け、今日は転校生を紹介する」

教室の中から織斑先生の声が聞こえ、スパーーーンと音が聞こえたが無視をしていた

「はいれ」

士はめんどくさそうな顔をしたがすぐにまじめな顔をした

「みなさん、初めまして今日から一緒に勉強する十年　士です、よろしく」

ありきたりな挨拶をしたが拍手もなく沈黙が続いた

「（あり～、間違えたかな～）」

前を見たらほとんどの女子生徒が小刻みに震えていた

「「「お」」」

「お？」

「「「男だあああああーーーー！！」」」

女子生徒が騒ぐ中、織斑先生と副担らしき女性が困った顔をしている

そんな中、

「あれ、士、俺てっきり学園都市に戻るのかと思っていたぞ」

空気の読めない発言に女子生徒の黄色い歓声が止む

「あれ？十年くんと織斑くん知り合いなのかな？」

「いやいや、どう考えても違うわよ」

「だって学園都市の人ですもの」

さまざまな言葉が飛ぶなか、副担の先生がまとめる

「はいはい、静かにしてください、十年くんの席は織斑くんの後ろです」

明らかに順番的に違うのだが、先生たちの配慮だろ

席に着いた士は織斑に質問に答えていた

「なんで入学式にでなかったんだよ？」

「うん？学園都市の中からでていくための資料製作が大変でな～」

「ふ～～ん、そうなんだ」

「おい、二人とも」

織斑の顔色がどんどん悪くなるゆっくり後ろを向く

織斑周りも静かになる

「ち、千冬ね「織斑先生だ」――織斑先生なんです

か？」

手には出席簿があり、織斑の頭をたたく、スパーンの音はこれだと思った

「いって～～～～！」

織斑が自分の頭を押さえる

「次は、転校そうそう馬鹿をやった十年、お前だ」

出席簿が振り下ろされるが、そのまま空振りに終わった

「何？」

士の体がなかったからだ

「やれやれ、だれだ～こんなところにペンを落としたのは？」

机の下から士が出てきた、どうやらまぐれでうまく逃げれたのだろう

本当にまぐれなのだろうか？

「ふっ、まぁ今回は見逃してやる、これでＨＲは終わる、以上」

二人の先生は教室から姿を消した

「よかったな、士、まぐれでもあれを受けなくて」

「ん？ああ、そうだな」

士は手を興味無さそうにひらひらと振る

「（あれ？　士のやつ、ペンなんて持ってないじゃないか？）」

４時間目も終わり、さすがに疲れたのか織斑はグダァーーと机に倒れていた

「はっはっは、織斑くんも情けないねぇ～」

「・・・・その言い方、今は突っ込まないでおく」

どうやら、かなりお疲れの様子だった

「・・・・・ちょっと、よろしくて？」

不意に後ろから訪ねてきた、士と織斑が振り向くと金髪のお嬢さんらしき人物がいた

士は一瞬顔を嫌にした後、部屋を出て行こうとした

「お、士さんにも、ようがあるのですよ！」

「・・・・・・・・・」

「なんですか！そのうわっなんだよ、みたいな顔、いいから戻ってきなさい！」

もうちょっとでとどくドアを名残惜しそうに見た後、士は自分の机に戻る

「・・・・・で、用ってなんですかな、お嬢さん」

「人を子供扱いしないでくださいな！・・・んっんまぁいいですわ」

「なぁ、士・・・」

「なんだい？織斑くん」

「この人・・・・・・誰？」

「まぁ、私を知らない！このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生であり入試首席のこの私を！」

「セシリア・オルコット・・・・んすぅ～う？どうか

っで・・・」

俺が試行錯誤している間に織斑が質問をした

「代表候補生って、なんだ？」

その質問はありか？士以外の教室にいた女子はどうもこけたらしい

「あのな～織斑くん、代表候補生ってのは国家代表ＩＳ操縦者のその候補生、確か学園都市の中にＩＳ代表候補生という名目で簡単な検査だけで入れた気がしたなぁ～？」

「へ～代表候補生ってそんなにすごいのか～、てっよくよく考えたら彼女と士って知り合いなのか？」

と何気に感心したり突っ込んだりする織斑だった

「あり？たしかオルコットって・・・」

「あいかわず、冗談のお得意な方ね？」

「いんや、やっぱ知らないなぁ～」

パァン！と何かをたたく音がした、セシリアが士を平手打ちしたのだ

「ひ、ひどいですわ士さん！何も、何も覚えていないなんて！」

セシリアはただ教室から出て行った、数人の女子がセシリアを追いかけて出て行った

「・・・・・・・・・」

士は何も言わず、真っ赤な頬を手で押さえていた

「おい、冗談はきついぞ、士」

織斑は、机から立ち上がっていた

「・・・・彼女のことは覚えているよ、ただ・・・・」

「え？おい、士！」

士は何も言わず出て行った

「――――――おぅ、俺だ、急にわり～な・・・・セシリア・オルコットという名に覚えはないか？――――そうか、そんな約束を、いや、後遺症じゃないんだ、タダ純粋な物忘れだ、へっ

心配性だな、あ？違う！？・・・・まあいい、じゃあなっ」

ここは士が誰もいないと踏んだ外のベンチで携帯をしていた、本来なら生徒は所持を禁止されているが、学園都市とのコンタクトをするため必要だとＩＳ学園も所持を許可してくれたのだ

「・・・・・やっぱ、俺」

「どんどん、記憶が消えてんのかな？」

士はベンチをおもっいきり叩いた

EP3，クラス代表？

「今年のクラス代表を決めてもらいたい」

休みの次の時間、織斑先生が授業の前にそんなことを言った

なぜか一人いないクラスのみんなに

「ん？十年はどこ行った、織斑」

「え？士はどこに行ったって・・・」

事情を知っている織斑にとって言うべきか言わざるべきかわからなかった

しかし、

「いんやぁ～おかしいねぇ～迷子だわ、ま・い・ご」

バタンとドアが開いたらそこには士が立っていた

「あ、授業始まっていましたか？・・・・」

そう言いながらも何気に席に座ろうとする士を織斑先生が止める

「貴様・・・私の授業がそんなにつまらないか？」

「・・・・そんなつまらないことで休むほど俺はバカじゃありませんよ」

士は手で電話の合図を出した

だが、それでも背景に炎が見えてしまう

「言ったはずだ、二度はないと」

今度こそ、出席簿ではなくグーが飛んできた

が、

がすん、と殴った音じゃない音が聞こえた

士が振り下ろされた鉄槌（パンチ）を手で受け止めていたからだ

「・・・・・俺だって、この鉄槌は死んでも受けたないんでね」

織斑先生が手を士の手から外した

「・・・だが」

「へ？」

がすん！と織斑先生のもう片方の手から出席簿が振り下ろされた

「・・・・・っう～～」

あまりの痛みから悲鳴も出ない士

「私のパンチを受けとめるのはたいした腕だが、まだまだ甘いぞ十年」

織斑先生は教壇に戻った

「さて、バカが遅れたのでもう一度説明する、このクラスから今年のクラス代表を決めてもらいたい、自薦他薦は問わない、誰かいないか？」

「はい、織斑くんを推薦します」

クラスの女子生徒の一人がほぼ即答の速さで言った

「はい、私も」

「私も」

クラスからつぎつぎに手が挙がる

「え？何で？」

「おぉ～、織斑くんがんばれ、がんばれ」

「なに、他人事みたいなことといったるんだよ」

「なにって、本当に他人事だからだね～」

と、男のないげない会話をよそにどんどん話が進んでいく

その中に

「はい、私は十年くんを推薦します」

「私も、それがいいと思います」

「いいよね～」

「ほら見ろ、お前も選ばれているじゃないか」

織斑が少しにやけた顔で士のほうを見る

「・・・・・・」

「ん？、士？」

疑問に思うのも無理わない、士はふざけて嫌そう

な顔をするのではなく、本当にいやな顔をしていたのだから、違和感はあった

「お～い、士ぁ～」

「ん、ああ、何かな、織斑くん？」

何を聞いたらいいのかわからなかった織斑は、少し困ったが話をしだした

「いや、お前もいいかげん、俺のことを一夏って呼べよなぁ～って思って」

士は鼻で笑った

「・・・いや、俺は織斑くんと呼ばせてほしいな、悪いかい？」

「いやいいんだ、ただ、友達はみんな俺のことを一夏って呼ぶから、つい」

「俺も友達って思っているよ～ただねぇ～～」

「ん？士、どうしたんだ、相談事だったｒ」

「いんや、いんやなんでもない、それよりも何か決まったみたいだぜ」

士が首で前を見ろのサインがあったので織斑は前も見て愕然とした

「それでは、織斑　一夏、十年　士から代表を決めるぞ」

織斑は焦っていたが士はただ楽しそうにその光景を見ていた

「待ってくれ、俺は――――――――」

「納得がいきませんわ！」

一課が否定をした時、後ろから聞いたことのある声が聞こえてきた

「・・・・・セシリア・オルコット」

「そのような選出は認められません！男がクラス代表なんて言い恥さらしですわ」

クラスの全員がセシリアを見ている中、士だけが前を向いていた

「それに・・・・」

セシリアは口をかみ、士のほうを見た、士はそれ

を無視するように前を向いていた

「だいたい、文化としても行進的なこの国に住まなければならない私の苦労が――――」

「セシリア・オルコット！！」

叫んだのは、ずっと前を向いていた士だった

「な、なんですの、今更謝っても遅いんですからね」

その話を無視するように士は机に座って話を勧める

「これは俺の独り言だが、学園都市のダチに代表候補生と言う名目で学園都市に入った人間を調べてもらった、その中に・・・あんたの名前があった」

「じゃあ、思い出してくれ――――――――」

「独り言だから答えられないが、学園都市に入ったあんたの案内役をしたのがこの俺だ、そしてこんな約束をしたらしい『いつか・・・あんたの名前を呼べる日が来れば、お前を、本当の意味で・・・愛せる女になるだろう』とふっ、我ながらうまいことを言ったねってね」

その時、クラスの女子が

「「「きゃあーーーーー！！」」」

だの、「狙ってたのに～～」

だの、明らかに告白と受け取れる言葉に興奮していた

「だが、俺は覚えていない」

その言葉に、教室が静まり返った

「そう、ですか・・・でも、なぜあの休み時間の時！私の名前を――――」

「なら、今からおまえと話をしてやる、セシリア・オルコット・・どう考えてもクラス代表は一人だ、だからお前が勝ったらお前の質問に全部答える、出来る限りなぁ、だが、俺が勝ったら・・もう、あの時の記憶を思い出させないでくれ・・・どうだ？」

セシリアは困惑したが、立ったまま悩んで答えを出した

「・・・いいですわ、かならず、かならずあなたのことを全部聞きますから！」

セシリアは士に、ビシッと指をさし宣言した

「ふっ、わけないぜぇ～セシリア・オルコット」

「はぁ～いい感じでしめたいが、オルコット、十年、織斑、クラス代表はもちろんＩＳで決める、試合は次の月曜、第３アリーナで行ういいな」

「ちょっ、ちょっとまってよ、千冬ね「織斑先生だ」――――織斑先生、明らかに俺はのけ物の方がいいんじゃないですか？」

すると士が織斑の肩をたたいた

「どんまい、織斑くん」

簡単に言おう、織斑くんは今はのけ物であると・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5479z/

仮面ライダーディケイド×ＩＳ（インフィニット・ストラトス）×とある科学

2011年12月24日11時51分発行